

氏名	長島 玲子
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第472号
学位授与年月日	平成29年3月24日
審査委員	主査 教授 石橋 豊
	副査 教授 丸山理留敬
	副査 教授 内尾 祐司

論文審査の結果の要旨

腹圧性尿失禁 (stress urinary incontinence: SUI) は、加齢・分娩等による骨盤底筋 (pelvic floor muscles: PFM) 等の障害により起こり、女性の生活の質を低下させる。骨盤底筋訓練 (pelvic floor muscles training: PFMT) は、SUIの保存的療法として推奨されるが、PFM自体の自覚的収縮は容易でなく十分に普及していない。申請者は、自他覚的に容易に確認できる大殿筋 (gluteal maximus muscle: GMM) 収縮がPFMTになり得るかどうかを検討するために、申請者が修士論文研究において得た骨盤底の支持力を示す指標としての膀胱頸部の動きが、PFMおよびGMM収縮時に相関するかを検証した。女性被験者24例 (未産婦3例、初産婦21例、年齢 29.5 ± 4.5 歳) に対して、シネMRIにより、正中矢状断像を每秒撮像し、安静時、GMM及びPFM収縮時における膀胱頸部の基準線からの高さや仙骨からの位置を測定して、最大値の相関及び10秒間の持続状況を統計的に比較解析した。その結果、GMM及びPFM収縮時に膀胱頸部は有意に上方へ移動し、前方へ移動する傾向が認められ、GMM及びPFM収縮時の膀胱頸部の高さ及び位置の最大値の間に有意に高い相関が認められた。さらに、GMM及びPFM収縮10秒間における膀胱頸部の高さ及び位置の変化の持続性には分布の高い一様性が認められた。このGMM及びPFM収縮時における膀胱頸部の動きの密接な連動性は神経支配から説明可能であると考察し、GMM収縮は、確認が容易なPFMTになる可能性を提唱した。本研究は、SUIで悩む若い妊産婦への朗報であり、今後対象者を広げてのさらなる展開が期待できるものである。